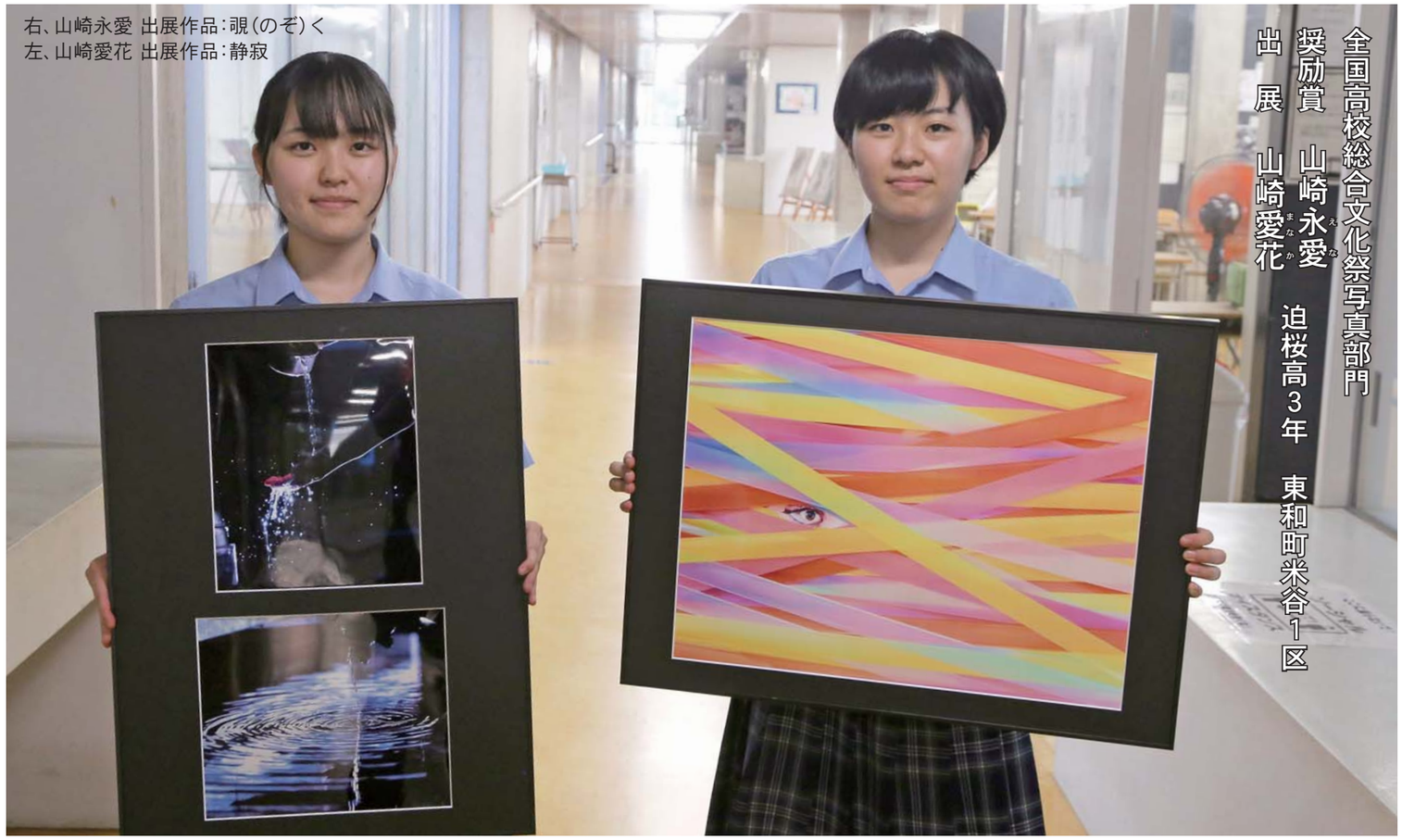
Zoom Up Tome 2020
Special

夏に挑む

新型コロナウイルス感染症の拡大により、例年とは違う夏を迎えた
そんな中でも、各種大会で活躍した本市の若者たち
彼らの夏の軌跡に迫る



右、山崎永愛 出展作品：覗（のぞ）く
左、山崎愛花 出展作品：静寂

全国高校総合文化祭写真部門
奨励賞　山崎永愛（えな）　迫桜高３年　東和町米谷１区
出　展　山崎愛花（まなか）

「フィルターの奥にはいつも」

各都道府県を代表する高校生が集まり、美術作品の展示や演劇、音楽の舞台発表など、芸術、文化を披露する全国高等学校総合文化祭（以下、全国総文祭）。文化部のインターハイと称される本大会の写真部門に、本市在住の山崎永愛、愛花（まなか）が姉妹そろって出場を果たした。

双子として生まれ、東和中では卓球部に所属。以前からカメラへ興味があった永愛と共に、愛花も写真部の体験入部に参加した。きれいな写真と優しそうな先輩たち。早々に入部を決めた二人へ、両親からプレゼントされた二台の一眼レフカメラが、彼女らの活躍の原動力になる。

迫桜高写真部の活動は、撮った作品に対して部員同士、意見を出し合うことがメイン。辛辣（しんらつ）な意見にも耳を傾け、反省と改善を繰り返しながらシャッターを切る日々が続く。部活動以外の時間も、カメラをのぞき込む時間が大半を占めた。プレゼントされた二台の一眼レフカメラは、永愛と愛花、お互いを被写体として、フィルターの奥に写し続けた。

全国総文祭への出場は、本大会前に開かれる県総文祭での上位入賞が条件。一学年上の先輩が出場した全国総文祭を目標に取り組んできた永愛の作品が昨年、県総文祭で銀賞を受賞する。入部から一年。二年生ながら全国総文祭への切符を手にした。

二人は、顧問の菊池純（じゅん）先生と共に佐賀県で開かれた全国総文祭へ。全国での入賞は逃した永愛。その作品の横に並んだ全国入賞作の数々に、二人は目を奪われた。

「悔しい」―。

帰宅後すぐ、翌年の全国入賞を目標にした作品へ取りかかった。

「私たちの作品は、お互いを被写体にしたものがほとんど。姉妹だからこそ、全てを説明しなくても撮りたい構図を共感し合える。最高の被写体が最も近くにいてくれることが、私たちの作品の一番の強み」と胸を張って話す永愛の言葉に、愛花が笑顔でうなずいた。

今回の出展作品である永愛の「覗（のぞ）く」には愛花の目を、愛花の「静寂」には永愛の手を。集大成になった今作にも「一番の強み」は生かされた。

県総文祭に集まった４０４点の作品。その中から、永愛が金賞、愛花が銀賞に輝く。二人そろって全国総文祭への出場を決めたほか、学校部門でも迫桜高が学校史上初めて県の頂点に立った。

全国総文祭は、感染症拡大防止のためモニター審査に。愛花の「静寂」は、紙に印刷することで映えるような構図で制作されている。「モニター審査と聞き、正直絶望したが、永愛の作品はモニターでもきれいに見えるのではと期待した」と愛花が話すとおり、鮮やかな色合いが評され、永愛の「覗（のぞ）く」が奨励賞を受賞。三年間の集大成が目標を達成した。

卒業後は、別々の道に進む予定の二人。二台の一眼レフカメラには、二人の成長の記録と努力の結晶が詰まっている。

全国高校総合文化祭
美術・工芸部門出展

出展作品：好物

「作品で笑顔を届けたい」

水野愛（あい）　佐沼高３年

小さい頃から物作りが好きだった水野は、高校入学後、美術部へ入部。入部当初は絵を描いていたが、美術の授業で立体制作の面白さに目覚め、絵画から分野を変えた。昨年の夏の終わりから１月の県高校美術展に向けて制作を開始。コンセプトが決まらず悩む中、顧問の阿部和弘（かずひろ）先生から「生活の中にある大事なものに目を向けたらどうだ」と助言を受ける。飼い猫「ミミ」が伸びをする何気ない姿が頭に浮かんだ。

作品は粘土を焼いて作る。主役の猫を焼いたとき、事件が起きた。猫の腹部が粉々に割れていたのだ。「制作を諦めてもおかしくないくらいの破損。それでもこの作品に懸ける彼女の気持ちは強かった」と阿部先生が振り返るように、水野は一つ一つ破片をかき集め丁寧に修復していった。完成した作品は、県高校美術展約500作品から優秀賞を受賞し、全国総文祭に出展される10点に選ばれた。その知らせに涙があふれた。「作りたいものを作っただけ。作品を見た人が笑顔になってくれればうれしい」と話す水野の創作活動はこれからも続く。

Photo ratt